

高校生の論文における文献表記法に関する研究

三笠 佑野

2018年告示、2022年実施の学習指導要領改訂により、高等学校では探究学習重視への転換が行われた。近年では高校生が学会発表や論文執筆など高度な研究活動を行う場合も多くなっている。このような状況において一つの問題としてあげられるのが、高校生が参考文献の文献表記を適切に行わない懸念である。小野ほか(2020)では、高校生の参考文献表記に不適切な例が多いことを指摘しているが、その詳細な内訳や年度間比較を踏まえた包括的な検討は十分に行われていなかった。そこで本研究では、高校生の論文における文献表記法の実態を明らかにすることを研究目的とした。

本研究では、高校生が執筆した論文を収集し、参考文献として表記されている文献リストを分析する方法をとった。まず2013年度と2022年度の双方でSSH(スーパーサイエンスハイスクール)指定を継続的に受けた9校を対象に、それぞれがインターネット上で公開している生徒論文集18冊を収集した。収集した論文集から計729本の論文・2130件の文献表記を収集し、日本における参照文献の標準規格とされるSIST02を参照してメディアの種類別に必須書誌事項の欠落の分析を行った。続いて、誤った文献表記のパターンのカテゴリー整理、および表出したパターンの事例収集をした。その結果、文献表記全体のうち、必須書誌事項をすべて網羅している表記は約4.0%にとどまり、論文単位で集計すると必須書誌事項が完全に揃ったものは全体の約0.3%という低い数値が示された。メディアの種類別では、雑誌論文や電子ジャーナルにおける巻数、号数、ページ番号といった必須書誌事項の欠落、Webサイト中の記事での著者名と入手日付の欠落など、メディアの種類それぞれ特有の文献表記の特徴が顕在化した。さらに2013年度と2022年度の状況を比較すると、学習指導要領が探究学習重視に転換された後も文献表記の必須書誌事項の欠落に大幅な改善は見られず、学習指導要領の探究学習強化が文献表記の質向上に直結していない現状が明らかになった。

これらの現状から、適切な文献表記が研究の再現性と信頼性を担保する要として必須となる行為であるにもかかわらず、高校生がその意義を十分理解せずに文献表記を行っている点が示唆された。また、同じ学校の先輩が執筆した論文や電子ジャーナルとして閲覧したPDFファイルの文献表記方法、URLの書き方など、特にインターネット上の情報特有の混乱を防ぐための段階的指導が必要であることを提案した。今後の課題としては、実践的な文献表記指導の体系化、教員や学校司書、司書教諭が探究学習の資料収集段階から文献表記に関するフィードバックを行う体制の整備、学校図書館との連携による専門性の導入などが挙げられる。本研究は、高校生の探究学習における文献表記の課題と改善方向を示す一助となると考えられる。

(指導教員 小野 永貴)